

就学前施設における保育記録のあり方に関する研究

—A市保育者のインタビュー分析を手がかりに—

Research on practical records in Preschools

— Through Analyzing interviews of Early childhood Education teachers —

中川 欣子, 塩路 晶子

NAKAGAWA Yoshiko and SHIOJI Akiko

鳴門教育大学学校教育研究紀要

第35号

Bulletin of Center for Collaboration in Community

Naruto University of Education

No.35, Feb, 2021

就学前施設における保育記録のあり方に関する研究

—A市保育者のインタビュー分析を手がかりに—

Research on practical records in Preschools

—Through Analyzing interviews of Early childhood Education teachers—

中川 欣子*, 塩路 晶子**

*〒772-8502 鳴門市鳴門町高島字中島748番地 鳴門教育大学大学院

**〒772-8502 鳴門市鳴門町高島字中島748番地 鳴門教育大学 学校教育研究科

NAKAGAWA Yoshiko* and SHIOJI Akiko**

*Naruto University of Education, Graduate School

748 Nakajima, Takashima, Naruto-cho, Naruto-shi, 772-8502, Japan

**Naruto University of Education

748 Nakajima, Takashima, Naruto-cho, Naruto-shi, 772-8502, Japan

抄録：本論文は、就学前施設において、幼稚園及びこども園に勤務する保育者がともに教育的環境を創りあげていく時に、保育記録はどのような役割を果たしているのか明らかにするとともに、幼稚園及びこども園にとっての保育記録のあり方について検討することを目的とした。公立幼稚園・こども園に勤務するA市公立幼稚園教員、保育教諭、園長を対象にインタビュー調査と分析を行った。インタビュー結果は、「現在の実態」「A市様式使用の実態」「保育記録に対する感情や悩み」「保育記録の生かし方や目的」「様式に希望すること」の5カテゴリーに分類された。幼保が一緒になるという変革期において、保育記録に対する意義と業務・職種の多様化から生じる多忙感に苦しむ現場の保育者の状況や悩みを解決するためには、保育記録に対する義務感の解消と保育記録を書く目的の明確化が重要であると考察された。

キーワード：保育記録, 保育者の専門性

Abstract : This paper clarifies the role of practical records for early childhood education teachers who work together and create educational environment. In addition, the purpose is to examine the ideal way of practical records for them. We interviewed kindergarten teachers, nursery school teachers, and directors of City A. We found five categories: “current situation”, “actual situation of using record sheet of City A”, “feelings and worries about practical records”, “how to use practical records”, “request of record sheet”. In the period when kindergartens and nursery schools unite together, it is important to eliminate teachers’ sense of duty to write practical record and clarify their purposes of writing records, in order to resolve worries of early childhood education teachers who have difficulties in records and feel busy.

Keywords : Practical records, Early childhood Education Teachers

I. 問題の所在

保育記録は、子どもの発達と学び、保育者の省察を生み出す重要なツールである。保育現場にいる保育者は、そのことを認識し、記録様式やそのあり方について日々真摯に向き合い取り組んでいる。しかしながら、現場ではしばしば「保育記録は大切であるが、記録をとる時間がない」「保育記録を残すことよりも目の前の業務や保育に時間を費やしたい」という声が聞かれることもまた事実である。

『幼稚園教育要領解説』（平成30年）では「評価の妥

当性や信頼性が高められるよう、例えば、幼児一人一人のよさや可能性などを把握するために、日々の記録やエピソード、写真など幼児の評価の参考となる情報を生かしながら評価を行ったり、複数の教職員で、それぞれの判断の根拠となっている考え方を突き合わせながら同じ幼児のよさを捉えたりして、より多面的に幼児を捉える工夫をするとともに、評価に関する園内研修を通じて、「幼稚園全体で組織的かつ計画的に取り組むことが大切である」としている。

保育記録は取らなければならない、記録を書くことは重要である、と現場の保育者はわかっているものの、そ

ここに意味を見出せないでいるという保育現場の状況との間にずれが生じているのではないだろうか。そこで本研究では、現職保育者にとっての保育記録の意味について考え直したい。

保育記録については、これまでも研究されている。河邊（2008）は幼児の遊びの様子を保育環境図に書き込む形式の保育記録「保育マップ型記録」と呼ぶ方法を紹介し、「保育マップ型記録」はこの意識化のプロセスの中に保育全体を俯瞰し、遊びの空間の関係を捉える視点を潜り込ませ、遊びを中心とした指導を基本とする保育の独自性を担保するものであることを明らかにしている。橋川（2016）は選抜研修における観察記録をもとにした園内研修の取組を分析し、観察記録をもとにした子どもの育ち・学びの共有が自らの保育への振り返りや子ども理解の共有にどのような影響をもたらしたかを明らかにしている。これらの研究は保育記録の手法や園内研修について述べられたものである。林（2011）は保育の質において重要であるとされる「過程の質」は保育者にとってどのように経験されているのかを、保育記録の質的分析より明らかにしている。

以上の先行研究からもわかる通り、保育記録が保育者の専門性を高めるための有効な手立てになることは間違いない。

『幼稚園教育指導資料第5集 指導と評価に生かす記録』（平成25年）では「教師は何らかの記録を日々残しているといっても、何のために記録をするかを意識せずに惰性で書いていたり、記録した内容を振り返り、育ちを捉えることがなかつたりすることもあるようです。日常の保育の中で、記録の作成に時間をかけることが容易ではない場合もあるでしょう」とある。

さらに2012年の子ども・子育て関連3法の施行に伴い、A市においては就学前の全ての子どもたちに質の高い教育を保障するという目的のもと、公立幼稚園と公立保育所の一体化が図られ、こども園として施設や職員の統一が進められている。同じ就学前の子どもたちの教育を担う幼稚園と保育所ではあるが、「保育者の専門性」や「保育記録に対する意識」は同様なのだろうか。

保育記録の意味を十分に見出せないでいる現場の状況と、こども園化という幼稚園と保育所が共に教育的環境を創りあげていく時期を鑑みた時に、今一度「保育記録」のあり方について考えていくことが必要な時期にきているのではないかと考える。

II. 研究目的

本研究は、現職保育者が多忙感を抱え、幼保一体化・こども園化という施策の中にある就学前施設において幼稚園及びこども園に勤務する保育者がともに教育的環境

を創りあげていく時に、保育記録がどのような役割を果たしているのかを明らかにすることを目的とする。特に、A市の保育記録における現状の検討から、公立幼稚園及びこども園に勤務する現職保育者が、保育記録についてどのように考え、保育を記録したり保育記録を取り扱ったりしているかについて検証するとともに、保育記録のあり方についての考察を行う。

III. 研究方法

本研究では、A市公立幼稚園・こども園に勤務し担任経験がある教員、保育教諭、園長に対して半構造化面接法によるインタビュー調査を行った。以下の表1は調査対象者の一覧である。

表1 インタビュー対象者一覧

A	新採・中堅教員（保育経験10年目までの幼稚園教諭）（以下、新採・中堅とする）	4名
B	主任（園主任・研究主任、保育経験10年以上の幼稚園教諭）	3名
C	保育教諭・副園長（元保育所勤務の保育士）（以下、保育所籍とする）	3名
D	園長	3名

インタビューの内容はICレコーダーに録音した。インタビュー期間は2019年6月から9月であった。半構造化面接法によるインタビュー調査を一人30分程度行い、録音した音声データを全て文字化した。主なインタビュー内容は、「今、保育記録をどのように書いていますか。（いつ・週にどの程度・どのように）」「書いた保育記録はどのようにまとめていますか。」「今のA市の記録様式について、どう思いますか。」「保育記録を書くことは好きですか。（理由も含む）」「保育記録について悩んでいることはありますか。」「保育記録を現在どう生かしていますか。」「今後、保育記録をどう扱えばいいと思いますか。」とした。なお、研究における倫理的配慮として、インタビュー対象者には、①研究目的の説明、②研究データは研究目的以外では使用せず、データの厳重な管理を行うこと、③個人が特定されないための配慮、④取得したデータは研究利用後に廃棄すること、について書面で伝え了解を得た。その後、質的データ分析法（佐藤2008）を用いて「オープンコーディング」「焦点的コーディング」を行い分析した。

IV. 結果

新採・中堅(A)、主任(B)、保育所籍(C)、園長(D)のそれぞれのグループでインタビュー分析を行った。カテゴリー化により、新採・中堅(A)、主任(B)、保育所籍(C)については類似するカテゴリーが見出されたため、グループを統合しカテゴリー化を行った。その結果、「新採・中堅、主任、保育所籍」グループと「園長」グループ

プについて、それぞれ「現在の実態」「A市様式使用の実態」「保育記録に対する感情や悩み」「保育記録の生かし方や目的」「様式に希望すること」の5カテゴリーが見出された。

1. 新採・中堅、主任、保育所籍グループの結果

新採・中堅(A), 主任(B), 保育所籍(C)については、下記の結果が見出された(表2, 表3, 表4, 表5,

表6)。

1) 現在の実態

保育記録は、書く分量は多くないものの、どの園においても毎日書いており、書く時間と場所は勤務時間内に園内で書くことが多いという実態が見られた。しかしながら主任は、保育記録以外の業務で忙しく書くことが難しいという実態を抱えている。

表2 現在の実態(新採・中堅、主任、保育所籍)

グループ	中カテゴリー	大カテゴリー	グループ	中カテゴリー	大カテゴリー	グループ	中カテゴリー	大カテゴリー
A B C	保育記録は毎日書く	保育記録の書き方や提出方法	A C	記録する内容を忘れないために保育中にメモをしたり保育直後に書いたりする	保育記録を書く工夫	A C	書く内容はその日印象に残った率直なこと	保育記録に書いている内容
A B C	書く時間と場所は勤務時間内(保育後、終礼前、終礼後)に職員室や保育室で		A	書くことを決めてから書いたり、保育中に浮かんだり、書きながら考えたりする		A B	書く内容は反省、感想、悩み	
A C	書く場所は職員室だが、書く時間がない時は自宅		C	記録は記憶の紐づけとして取り扱い保育記録は別に書く		A B C	書く内容は遊び、子どもの姿、育ち、考察、教師の意図とかかわり、改善点	
A C	一日分に書く分量は少ない		A B	書き方の工夫は10の姿で色分けや下線を入れたり、付箋で色分けしたりすること		A B C	書く内容はクラスのことや個人のこと、自分が担当する子ども	
A B C	保育記録は手書きだが、PCで作成したい		B C	自分と相持ちで異なる記録を書く場面		B C	書く内容は活動、行事	
B	記録を書くのはクラス担任		A	書き方の工夫は文章中心や個人名簿に記入		A	書く内容は子どもの嬉しい姿や保育でやりがいを感じたこと	
B	記録以外の業務で忙しくて記録を書けないという実態		A	書き方の工夫はねらいに添って書くこと		A	書く内容は園長に伝えたいこと	
A B	人、経験年数、園長先生、園により異なる保育記録の書き方や提出方法		B	書き方の工夫は具体的な表現のエピソード		C	書く内容は事務連絡	
C	保育記録枠を半分にしたたり、書く対象を相持ちと交代で書いたりする		B	書く内容に主観や考察(振り返り)を入れない		A B	自分自身の変容は子どもの発言への関心、自分の感じ方や子供への熱意の変化と記録の大切さへの認識が生まれたから	
C	0歳児の記録は乳児日誌と月指導計画の公文書である		B	記録に個人のことを書かない、書く場合は一週間で全員が出てくるように書く		A	苦痛だったり忙しかったりして保育記録を書かなくなった過去	
B C	提出方法については週案とセットで週末か週明け	A B C	保育記録は綴じるだけで見返さない	A	保育記録の変容は子どもの思いを入れたり考察を書いたりして書くようになったこと			
A B C	鉛筆で欄外に下線とコメントを書いて指導(アドバイス)してくれる園長と副園長先生	A B C	保育記録を見返すのは個人懇談、実践提出、保育の振り返り、特別支援教育に生かす時	B	中堅(30代)は深く学びたくなるものの、保育に対する慣れが保育記録に対する取り組み方にマイナスに表れる			
A C	園長のコメントは園長や園により様々である	B	子どもの姿は保育記録を通さなくても口頭でできる	B	保育記録は自身の学びや保育のゆとりにつながっている			
A C	園長のコメントは学びと自信になり成長を感じることができ	C	記録を置く場所が決まっていることで他の学級のものを見ることができ	B	様々な保育記録の方法を試行錯誤している			
A C	保育記録を丁寧に見てくれ、肯定的、共感、認めのあるコメントは嬉しい	C	自分の保育の振り返りを記録に記述することで相持ちに意見を伝えている	B	若年教員は同僚の記録を見たいと思っている			
A B	悲しいコメントはネガティブなものやハンコだけのもの	A C	同僚(他者)の記録に興味があり、見たいし参考にしたい、気付きがある	B	主任として職員の保育記録にコメントをする義務はない			
B	専任園長のコメントは、保育内容、共通理解に関すること	A	同僚の保育記録を真似たが自分には合わなかった	C	書くことで変容があったと感じる職員と職員の変容はないと感じる副園長			
A	保育記録にタイトルをつけるというコメント指導があった	B C	ベテラン教員はつなげて書き、若年教員は行事や具体的支援、全ての出来事を書く	C	保育所と子ども園で違う記録の様式			
A B C	コメント以外でも園長が記録を話題にしてくれて語り合う	B	同僚の記録に興味があるが、見る見ない見るポイントや気付きは人それぞれ	C	保育所の記録はT1が主に書く保育日誌(A4)であり、所長と副所長が週2,3回コメントする			
A	早期返却により保育に生かせる	B	行政研修ではないが市幼研主任研ではある保育記録を活用するための研修	C	5年ほど前にあった毎日記録を書くことが大変という意見から生まれた保護者向けトビックスが保育所の記録である			
C	記録は子どもの姿や保育者のかかわりがわかり職員と園長がつながりを実感できる	B	記録の書き方を園長先生や検討委員会から指導された	C	保育所は記録を書くことに慣れておらず、個人記録が別にあることが課題である			
C	コメントを書く時の配慮は園長と重ならないこと、職員の良いところをピックアップすること	C	時間に内容に限りがある保育士の新採研と記録に焦点をあてた指導や研修はないという実態	C	異動した当初は疑問が多かったことも園の実態			
						C	以上児と未満児と生活の流れや設備が異なり互いの姿をみないが、担任同士は職員室や休憩室で過ごし子どもの話をする	保育所(保育所籍)特有
						C	T1T2で子どもの育ちをつなぐには話をすることが必要	
						C	18時半に子どもが帰ってから行う事務や保育準備をし、話し合う時間がとれない	
						C	保育士も参加することも園の現教では子どもの姿を伝え合うという意識と共通理解が生まれた	

表3 A市様式使用の実態（新採・中堅、主任、保育所籍）

グループ	中カテゴリー	大カテゴリー
	A市の様式を使用している	A市様式使用の実態
A	A市様式の使用の有無は園や園長により異なる	
B	様式に書ききれないことがある	
	A市様式の枠を半分にして記録することで相持ちの記録を見ることができる	
A	育ちを週でまとめるための様式を自分なりに工夫している	
A	隙間時間を利用したり一斉に書いたりして書き続けられるような工夫をしている	
A	工夫のきっかけは主任や自分たちの改善意識の高まり	

表4 保育記録に対する感情や悩み（新採・中堅、主任、保育所籍）

グループ	中カテゴリー	大カテゴリー
A	保育記録を書くことは好き・得意ではなくとも書くことが楽しいこともある	保育記録に対する感情
A	保育記録を書いていて楽しいのは子どもの意図や考えを理解できた時	
B	保育記録を書くことは得意でない	
B C	保育記録は負担である	
B	義務感で書く保育記録は面白くない	
C	幼保一体化になり週案の様式が記録になったことで仕事が増えた	
C	記録を毎日書くことは必要ない	
C	書くことで子どもの成長が見られるため記録は必要である	具体的な悩み
A B	どんな様式・どんな生かし方がよいかはわからない	
C	自分の保育記録に対する悩みは小さい	
A	保育記録について考えることはないが、ないと保育に不安を感じる	
A	保育記録の悩みは個人記録とのつながり	
A	多忙なため保育記録を書くのは負担である	
A	実習録のようになつたり客観的でなかつたりするという書き方についての悩みがある	
A	行事になる、遊びが書けない、考察が書けないといった書きたい内容についての悩みがある	
B	保育記録の評価に対して不安である	
B	全体よりも個に焦点があたる、日記風になる等書き方に関して悩んでいる	
B	同僚と自分の悩みの違いに葛藤がある	
B	現行様式は物足りなく工夫が必要だと感じている	
B	保育記録の事務面について悩んでいる	
C	振り返るまでに至らないという悩み	
C	職員配置により記録にどこまで記述するべきかという悩み	
A C	枠（分量）、タイトルをつけること、項目が不明瞭であることが悩みである	悩みのきっかけ
A	保育記録の悩みのきっかけは自分の意欲	
A	保育記録の変化のきっかけは園長のコメントなどから	
A	保育記録の変化のきっかけは現教	
A	保育記録の変化のきっかけは子どもを見ることができる環境	
A	保育記録の変容時期は人それぞれ	
A	園内外の研修で保育記録について学んだり悩み相談したりする機会の必要性	

表5 保育記録の生かし方や目的（新採・中堅、主任、保育所籍）

グループ	中カテゴリー	大カテゴリー
A B	園の課題、個人の課題に合った生かし方	保育記録の生かし方
A B	保育記録を現教、保育カンファレンス、遊びの捉えに生かしたい	
B	保育記録そのものを活用する	
B	見返し見合うことで生かされる	
B	保育記録を個人記録に生かす	
B	保育記録を週案作成で生かす	
B	保育記録を同僚へのアドバイスに生かす	
B	保育記録を保護者伝達に生かす	保育記録の目的
A	書く要素は楽しいこと	
B	生かせる保育記録の必要性	
A B C	義務的でなく自分の成長につながる保育記録	
A B C	反省や振り返り、幼児理解につながる保育記録	
A C	書くことで子どもの育ち、保育者の意図がわかり面白さを実感する保育記録	
A	保育記録を書く動機は園長との嬉しいやりとり	
A	若年教員としての目的が生かされた保育記録	
C	書くことで生まれる IT の共通理解	

表6 様式に要望すること（新採・中堅、主任、保育所籍）

グループ	中カテゴリー	大カテゴリー
A	個人記録とつながる保育記録	様式そのものについて
A	保育記録にタイトルをつけることは必要である	
A	現様式についての見直しが必要である	
B	様式（枠・分量・書くポイント・項目・指針）が必要である	
B	書き続けることができる保育記録	
C	記録がどうなっているかわからない	
C	首長部局から事務削減と事務として認識されている記録	
C	簡単なり方と有効活用	キャリアについて
A B	個人の力量に合わせた保育記録	
B	若年教員が書く意味が感じられるような保育記録の必要性（様式・反省・感想・学びなどとりあえず書いてみる）	

書く内容は、その日印象に残ったことを中心に、子どもの姿や教師のかかわり等を書いている。特徴的なこととして、保育所籍は事務連絡等も書き入れ、新採・中堅は園長に伝えたいことを書くという傾向にある。そして保育所では、記録が公文書であるという認識が強く、保育記録については記録をもとに書き直しているという実態が見られた。また、幼稚園においては、10の姿で色分けする、下線を入れる、付箋で色分けする等書き方の工夫も行っているということが明らかになった。

園長のコメントについて、新採・中堅は園長に伝えたいことを書くという傾向があり、園長のコメントに対す

る思いが多く見られた。ただ、どの職員も園長のコメントによる学びと自信を感じており、園長が保育記録を丁寧に見てくれることや肯定的・共感・認めのあるコメントがあることに対しては嬉しさを感じ、ネガティブなコメントや印だけの時には悲しさを感じている。

他の保育者が記述する保育記録からの学びについて、新採・中堅と保育所籍では、同僚の記録に興味があり、見て参考にしたいと思っており、そこからの気付きもあると感じている。しかし、他の保育者の記述方式を真似てはみたが自分には合わなかったという経験もしている。他者の保育記録については主任も触れてはいるが、他者の保育記録を見るか見ないか、見る場合のポイント、またそのことによる気付きは人それぞれであると考えている。また、新採・中堅は、園内外の研修で保育記録について学んだり相談したりする機会を望んでいる。これについて主任は、他者の保育記録を学ぶ機会が研修として以前は存在したが、幼保一体化に向けた施策の中で統一化された行政研修の中では行われなくなったことを振り返っている。しかしながら、そのような状況にあっても、主任には主任独自の自主研修会において学ぶ機会があるとしている。保育記録の研修の有無についての若年教員の悩みについて、主任はその悩みを感じてはいるものの、自身が職員の指導に携わる義務はないと考えている。一方、保育所籍は保育記録に関する研修そのものがないという実態が明らかになった。

保育記録を通した自分自身の変容について、新採・中堅と主任は、保育場面の読み取りの変容とともに、その変容は保育記録が大切であるという認識から生まれた変容だと感じ取っている。このような時期を、主任は自身のキャリアを通して振り返っている。中堅の時期は深く学びたい時期ではあるが、保育に対する慣れも出てくるため、保育記録への取り組み方にマイナスに表れることがあったとしている。そしてこのような経験が、様々な保育記録の方法を試行錯誤する時期へとつながっていったと振り返っている。これは、新採・中堅が、書く意味を見出すことができず、書く多忙感・負担感に追われ、苦痛で書かなくなった過去ともつながる部分である。

保育所籍特有の実態について、職員は保育記録を書くことでの自身の変容を感じ取っているが、副園長はそのような職員の変容は見られないと捉えている。保育所とこども園の記録様式は異なっているため、異動当初は職員が戸惑いを感じたとも振り返っている。また、保育記録を書くことに職員が慣れていないという状況があるとも述べている。そのような状況から、保育所では保護者向けトピックスを記録として取り扱うという状況が生まれたという経緯があったと振り返っている。しかしながら、勤務形態の厳しさから話し合う時間は取りにくいものの、子どもの姿を伝え合う重要性については感じ始め

ている。その理由として、こども園となり、幼稚園出身の保育者と保育所出身の保育者が共に働く場に存在することになったことで、幼稚園で行われてきた園内研修に保育所籍出身の保育者も参加する機会を得たからだと考えていることが明らかになった。

2) A市様式使用の実態

A市で現在使用されている保育記録の様式について、園や園長の考え方により様々であるものの、使用している園が多い。特にこども園では使用している状況となっている。

現在の様式に対して、主任は分量が少量であるため、書ききれないことがあると不満を感じている。また、新採・中堅は、様式や時間の確保など工夫しようとしていることが明らかになった。

3) 保育記録に対する感情や悩み

保育記録に対する感情について、全保育者が保育記録に対する負担感を感じてはいるが、書くことで子どもの成長が見られるため保育記録は必要だという思いが芽生えている。新採・中堅は、保育記録を書くことは得意ではないが書くことは楽しいと感じており、特に子どもの意図や考えを理解できた時が楽しいと感じている。そして、保育記録がないことについては不安に感じてはいる。負担感については、主任と保育所籍では負担感の理由が違っている。主任は義務感で書く保育記録が面白くないと思っている。一方、保育所籍は幼保一体化になり記録の仕事が増えたことによる負担感をあげており、記録を毎日書くことは必要ないと思っている。しかし、書くことで子どもの成長が見られるため、保育記録は必要だという思いも芽生えている。

悩みについて、新採・中堅と保育所籍は、枠(分量)、保育記録のタイトル、保育記録の項目が不明瞭なことを悩みにあげている。新採・中堅は、個人記録とのつながりや書き方、書きたい内容といった多くの悩みを抱えている。保育所籍は、振り返るまでに至っていない現状であると述べている。さらに、一学級を二人体制で担任するという職員配置制度であるため、自分の記録を相持ちの保育者が見ることで相手がどのように思うかを懸念しており、記録をどこまで記述したらよいかという悩みをあげている。一方主任は、自身の保育記録がどのような評価に値するのかという不安を感じている。そして、同僚と自分の悩みの違いに対する葛藤があり、事務面についても悩んでいる。また、現行様式についての物足りなさや工夫の必要性も感じており、新採・中堅と同様に、書き方についての悩みも抱えている。こういった悩みに至るきっかけとして、新採・中堅はきっかけの時期を自覚している。悩みのきっかけは、自分の意欲、園長のコ

メント、園内研修、子どもを見ることができ環境の変化をあげているものの、悩みに至る時期は人それぞれである。そして、園内外の研修で保育記録について学んだり相談したりする機会を望んでいるということが明らかになった。

4) 保育記録の生かし方や目的

保育記録の生かし方について、新採・中堅と主任は、園や個人の課題に合った生かし方を望んでいる。具体的に、園内研修、保育カンファレンス、遊びの捉えに生かしたいと考えている。さらに主任は、保育記録を個人記録、週案作成、同僚へのアドバイス、保護者伝達に生かしたいと思っている。また、保育記録は見返したり見合ったりすることで生かされると感じているとともに、保育記録そのものを活用したいとも考えている。一方保育所籍については、この生かしたい部分の考えが見受けられなかった。しかし、保育記録は保育者間で共通理解ができるとは感じている。

保育記録の目的について、全職員とも、保育記録は義務的でなく自分の成長につながるものだとし、反省や振り返り、幼児理解につながるものだと感じている。さらに新採・中堅と保育所籍は、保育記録を書く楽しさを重要視しており、書くことで面白さを実感できると思っている。新採・中堅は、園長との嬉しいやりとりを書く動機にあげており、若年教員としての目的が生かされるような保育記録の目的を望んでいる。主任は生かせる保育記録の必要性を感じている。保育所籍は、保育記録は保育者同士の共通理解ができると感じている。

5) 様式に要望すること

新採・中堅は、個人記録とのつながりがもてること、タイトルをつけられることを様式枠に盛り込んでほしいとしており、現様式の見直しが必要であると思っている。主任は、様式は必要であり、様式には枠・分量・書くポイント・項目・指針を盛り込む必要があるとしている。また、書き続けることができる保育記録様式の必要性を感じている。また、主任は、若年教員が書く意味を感じられるような保育記録の必要性を望んでいる。これについては、新採・中堅が保育記録に感じている目的とも一致する思いである。保育所籍は、行政（首長部局）が記録を事務削減の対象にあげていることを意識した発言が伺える。さらに、キャリアについても触れており、新採・中堅と主任は、個人の力量に合わせた保育記録になることを望んでいる。

2. 園長グループの結果

園長(D)については、下記の結果が見出された（表7、表8、表9、表10、表11）。

表7 現在の実態（園長）

中カテゴリ	大カテゴリ
保育記録は毎日書くが書けない職員もいる	保育記録の書き方や提出方法
記録を書くのは担任になった職員	
書く場所や時間は職員により様々である	
提出方法については園長に週案とセットで月曜日	
年度当初に様式や内容、誰が書くかなどの共通理解を行う	保育記録を書く工夫
複数で学級を担当し全教員が記録を書くことで教師の支援をつなげる	
記録の負担感に対して職種や分量を配慮している	
保育記録にタイトルをつける	保育記録に書いている内容
保育記録にエピソード記述を書く	
保育記録に園や人間関係を書く	
書く内容はその日印象に残った場面	
書く内容は悩み	
書く内容は嬉しかったこと	
書く内容は子どもの良さや課題	
コメントについての考えは園によって違いはない	園長先生のコメント
コメントでは配慮してアドバイスをしている（職員の心情・早期返却・見方の変容）	
コメント内容は幼児理解や環境についてのアドバイス	
園長のコメントを書くスペースがないのでコメントはラインを引いたり一言書くのみ	
保育記録の様式や書き方についてアドバイスをした	
園長のコメントから生まれる職員とのやり取りと変容	
保育記録を向上させたいと考える職員がいる一方、気付きのない職員もいる	保育記録の取り扱い方や自分の変容（園長として）
職員の保育記録から学びがある	
保育記録様式で保育と個人の2パターンあった	
一人で担任をもつことが多かった過去	
先輩の保育記録を参考にしたが、続けられなかった過去	

表8 A市様式使用の実態（園長）

中カテゴリ	大カテゴリ
A市様式を使用している	A市様式使用の実態
A市様式ではなく主任の様式を参考にしている	
こども園ではA市様式を担任数で枠を分割して使用している	
A市様式のメリットは枠が小さく簡単でかきやすいため毎日書き続けられること	

表9 保育記録に対する感情や悩み（園長）

中カテゴリ	大カテゴリ
しんどさと大切さ	保育記録に対する感情
園長としての悩みはない	保育記録に対する悩み
若年教員の悩みは書き方や内容がわからないこと	
負担軽減と時間短縮を考慮した有効的な研修のあり方を模索している	

1) 現在の実態

保育記録は、担任になった保育者が書くことが多く、毎日書くことができる保育者と毎日書けない保育者がいる

表10 保育記録の生かし方や目的（園長）

中カテゴリー	大カテゴリー
保育記録は生かすことで意味が生まれる	保育記録の生かし方
記録をもとに保育記録やエピソード記述を書く	
保育記録にタイトルをつけることで生かされる	
保育記録は評価する（される）ことで生かされる	
保育記録は多面的にみること（カンファレンス）で生かされる	
保育記録を園内研修（現教）で生かす	
保育記録は保護者伝達（連携）で生かされる	
保育記録を特別支援教育で生かす	
異年齢交流を通じた環境の見直しを教員の協働性に生かしている	
楽しさ（自分の学び、義務でない）につながる保育記録	保育記録の目的
保育記録は記憶の整理をするために書く	
教育・保育現場での保育記録の目的は、幼児理解と評価・計画のため	
保育記録を書き続けることの必要性和意義	
保育記録の目的や生かし方を行政や教員・保育士とともに協議し創ることの必要性	

表11 様式に要望すること（園長）

中カテゴリー	大カテゴリー
様式の必要性や形式はわからない	様式そのものについて
書きやすさと書き続けることを考慮した様式の必要性	
キャリアによって様々な方法を試すことができる保育記録様式	
様式（枠・分量）が必要である職員もいる	
共通様式は共通理解が図りやすく、前後のつながりがもちやすいメリットがある	
幼稚園とこども園の記録の目的の違いとこども園ならではの保育記録の必要性	こども園化が推進される中で必要なこと
幼稚園教諭と保育士の保育記録に対する意識の違い	
幼稚園とこども園の勤務体制の違いによる保育記録に対する意識の違い	
こども園の記録の目的はカンファレンスや伝達を補えること	

るといふ実態があると捉えている。書く場所や時間は保育者によって様々である。提出については、週案と一緒に提出している。書く内容は保育者により様々であり、保育記録にタイトルをつける、エピソード記述を書く、図や人間関係を書く、印象に残った場面を書く、悩みを書く、嬉しかったことを書く、子どもの良さや課題を書くなどが見られるとしている。

園長のコメントについて、職員が提出してきた保育記録に対しどの園長もコメントを返している。コメントは、書くスペースがないためラインを引いたり一言書いたりするのみではあるが、幼児理解や環境についてのアドバイスとともに、様式や書き方についてのアドバイスをすることもあるとしている。コメントを書く際には、早期返却をすること、職員的心情、職員の見方が変容するようなコメントをするよう配慮している。自分がコメントすることにより、職員とやり取りが生まれ、職員の

変容を感じたりすることも認識している。また、年度当初に様式や内容、誰が書くかなどの共通理解を行ったり、複数で学級を担当し全教員が記録を書くことで教師支援につながりしている。一方、保育記録の負担感に対しても危惧しており、職種により配慮したり分量を調整したりもしている。

保育記録を通じた変容について、保育記録を向上させたいと考える職員がいる一方、気付きのない職員もいるということを感じている。また、園長は自分自身の変容についても触れている。職員が園長からのコメントからの学びを感じているのと同様に、園長も職員の保育記録から学びがあると感じている。自分自身の過去についても振り返っており、昔は、保育記録と個人記録の2パターンの保育記録があったこと、自分自身も保育記録について悩み先輩の保育記録を参考にしたが続けられなかったこと、また、一人で担任をもつことが多かったことをあげている。

2) A市様式使用の実態

園長のインタビューからは、現在のA市様式を使用しているか否かについて、使用している園もあれば使用していない園もあることがわかった。また、主任の様式を参考にして書いている保育者もいることも明らかになった。

そして、こども園では、A市様式を使用しているが、既定の枠を担任の数で分割して使用している。

A市様式のメリットについても分析しており、枠が小さいこと、簡単に書きやすいこと、毎日続けられることをあげている。

3) 保育記録に対する感情や悩み

保育記録に対する感情について、園長によると、職員はしんどいであろうと推し測っているものの、それでも保育記録を書くことは大切なことと考えている。

悩みについて、園長という立場からの悩みはないと考えている。ただし、若年教員は悩みを抱えており、その悩みは書き方や内容がわからないことであると考えている。また、全教員の悩みを解消する配慮として、負担軽減と時間短縮を考慮した有効的な研修のあり方を模索していることが明らかになった。

4) 保育記録の生かし方や目的

保育記録の生かし方について、保育記録は生かされなければ意味がないと考えている。その上で、生かすためには、まず記録をもとに保育記録を書いたりエピソード記述を書いたりすること、その際、保育記録にはタイトルをつけることで生かされるものであることと考えている。また、保育記録は評価したりされたりすることで生

かされること、書いた保育記録を多面的にみること（カンファレンス）で生かされるとも考えている。生かされ方の具体例としては、園内研修、保護者伝達（連携）、特別支援教育に関すること、異年齢交流、教職員の協働性をあげている。

保育記録の目的については、楽しさにつながる保育記録の必要性について述べている。楽しさとは、自分の学びにつながることで、義務的でないことが必要であるとしている。保育記録を書き続けることが必要であり、その意義についても述べている。また、記憶を整理するために保育記録を書くことが重要であるとも考えている。さらに、書いた保育記録は、幼児理解につなげたり、評価につなげたり、次の計画につなげたりできるものであると述べている。

このカテゴリーの園長グループの特徴として、幼稚園だけのことではなく、こども園化を見通した意見も述べられており、保育記録の目的や生かし方については、行政や幼稚園出身の保育者、保育所籍出身の保育者とともに協議し創ることが必要であると考えている。

5) 様式に要望すること

園長は、様式の必要性や形式はわからないとしている。しかし、様式には書きやすさと書き続けることを考慮することが必要だと考えている。また、共通の様式にした場合、そのメリットとして、共通理解が図りやすかったり、前後のつながりももちやすかったりするとあげている。

「保育記録の生かし方や目的」カテゴリーでも述べられていたが、園長は、こども園化が推進される中で必要なことについて考えている。幼稚園とこども園とでは記録の目的に違いがあり、こども園化が進められる中で“こども園ならでは”の保育記録の必要性を感じている。その際、幼稚園出身の保育者、保育所出身の保育者の保育記録に対する意識の違いを考慮する必要がある、その違いは幼稚園とこども園の勤務体制の違いにより生じていると感じている。この勤務体制の違いから生じる問題を解決する際に考慮すべき「こども園ならでは」の保育記録の要素として、「保育カンファレンス」や保育者同士で日々行われている「伝達」が補えることが盛り込まれてほしいと考えている。

保育記録の認識として、行政（首長部局）は事務として捉えており、行政（首長部局）から削減するように伝えられていることを懸念していることも明らかになった。

キャリアについても触れられており、キャリアにより様々な方法を試すことができる保育記録様式の必要性について述べている。様式が必要な職員と必要でない職員があり、その際、枠の有無、分量への配慮が必要である

と述べている。

V. 考察

本研究は、幼保一体化という保育施策の中にある就学前施設において幼稚園及びこども園に勤務する保育者がともに教育的環境を創りあげていく時に、現職保育者が保育記録はどのような役割を果たしているかと捉えているのかを明らかにするとともに、幼稚園及びこども園にとっての保育記録のあり方について検討することを目的とした。

A市では保育記録を書く分量はそれほど多くはないにもかかわらず、どのキャリアにおいても保育記録に対する負担感を感じているという現状があることがわかった。しかし、保育記録を書く意味についてはどのキャリアも理解しており、それは保育記録を書き続けることにより書く意義へと変容するものであることもわかった。また、保育記録にどのような意義を見出しているか、そのために必要な要素は何かについては、個人、各キャリアによって異なることもわかった。保育記録を書く分量だけが負担感につながっているのではなく、一律な様式に記述することを求めるような状況が保育記録を書くことに対する義務感を生み出し、書く意味を見出せず、負担感を作り出しているのだと考えられる。

以上のことから、保育記録のあり方について下記の5点を考慮する必要があると考える。

1点目は、「保育記録に対する負担感・多忙感」である。新採・中堅・主任・保育所籍も園長もともに負担感について述べている。ただし、新採・中堅・主任・保育所籍は楽しいと感じる時期があると述べており、園長はしんどいけれども保育記録は大切なものであることをわかってほしいと考えている。両者とも保育記録の意義について認識している様子が伺える。一方で、若年教員の悩みについて推し量る園長ではあるが、主任については述べていない。しかし、悩みについての項目において、主任は多くの悩みをあげている。特に、自分自身の保育記録に対する評価や、自分と同僚との悩みの違いに対する葛藤、保育記録の事務としての取り扱い方等、悩みは多岐にわたっている。つまり、こうした主任の悩みを解消できるような状況が、現状の現場では整っておらず、主任が悩みを一人で抱えることにつながっているのではないかと考えられる。そしてこのことが、園長と主任の気持ちのずれが生じることにつながっているのではないかと推測される。このずれは、新採保育者・中堅保育者・主任・園長が共にある幼稚園の現場において、幼稚園がチームとしてうまく機能しにくい現状を生み、負担感・多忙感の一要因にもなっているのではないかと考えられる。例えば、園長は負担軽減や時間短縮と保育記録の充実を

図るための有効な園内研修のあり方を模索している。保育記録の充実や園内研修のあり方については、本来、研究主任も兼ねている主任が中心となって進めていかなければならない。しかし、主任は自身の多忙感と園組織における自身の役割を十分理解しづらい状況にあり、そのことが本来の主任の職務を実行することが厳しいことにつながっている。主任という職務の定義の曖昧さが、主任と園長との間に職責への思いに対するずれを生じさせている。園長の主任への期待感の大きさが、主任の現状に心を寄せることが難しいことにつながっているのではないか。

2点目は、「義務的ではなく、自分の成長や学びにつながる保育記録」である。保育記録の生かし方や目的カテゴリーにおいて、全グループともにこの点を求めている。保育記録の生かし方について、具体的に様々な生かし方を行っているが、特に新採・中堅・主任は、保育記録を見返すこと、同僚の保育記録を見たいことについて述べている。これについては園長も、保育記録を多面的に見ることについて述べている。それを解消する手段として、「保育カンファレンス」というキーワードが抽出されている。

3点目は、「保育キャリアと保育記録」である。全グループともに、このキャリアについて触れている。新採・中堅は、個人の力量に合わせた保育記録してほしいことを望んでおり、園長もキャリアによって様々な方法を試すことができる保育記録様式について述べている。

4点目は、「こども園化と保育記録」である。園長は、こども園化が推進されていく中で、必要なことについても考えている。幼稚園とこども園では記録の目的に違いがあり、“こども園ならではの”の保育記録の必要性について言及している。この幼稚園出身の保育者、保育所出身の保育者との間で生じる目的の違いは、勤務体制の違いからもきていると感じており、勤務体制の違いから生じる意識の違いを解消する要素として、2点目でもあった「保育カンファレンス」というキーワードがあげられている。多忙な状況の中での保育カンファレンスは、時間確保の難しさから困難なことも想定されるが、1点目のチームとして機能しにくい状況を解消する有効な手立てになるのではないかと考える。そして、保育記録は、時間のない中で保育カンファレンスを補うことができるツールともなりうるのではないかと考える。

5点目は、「行政」である。保育所籍で特徴的なこととして、保育記録を園長に提出・保管し、市からの監査対象となる事務文書として意識した発言が見られている。これは、行政（首長部局）にとって保育記録は事務文書という取り扱いであり、負担軽減の観点から考えた時にこうした事務文書は削減していくよう求められていることと関係していると考えられる。園長も同様の認識

をしており、さらにそのことについて懸念もしている。こども園化が進んでいく中で、この行政との関係性を切り離して考えることは難しい。行政、幼稚園出身の保育者、保育所出身の保育者が、ともに協議し新たな保育記録とそのあり方を創っていくことの必要性があるのではないだろうか。

VI. まとめと今後の課題

本研究の対象としたA市のように、公立の就学前施設においては、同じ地域（校区）に存在する幼稚園と保育所が一緒になりこども園として歩み始めることがある。幼稚園と保育所ではそれぞれに別の文化を築きながら存在してきたという経緯を鑑みると、経験年数によるキャリアに加えて、幼稚園出身の保育者、保育所籍出身の保育者、そして新たに保育教諭として採用された者というように、キャリアの概念についても考慮することが必要になってくるのではないかと考える。そして、このような多種多様なキャリアの者が集まって共に保育を創っていく際に共通項となるのは子どもの姿であり、その理解のために重要となるツールの一つが「保育記録」となるのではないかと考える。

幼保が一緒になるという変革期において、保育記録に対する意義と業務・職種の多様化から生じる多忙感との狭間でジレンマに苦しむ現場の保育者たちの状況や悩みを解消し、その意義と意味に問いかけるような保育記録とはどのようなものであるか。ポイントは、保育記録に対する義務感の解消と保育記録を書く目的の明確化ではないかと考える。

今後、これらのことについて具体的に考えていくことを課題としたい。

VII. 引用文献

- 河邊貴子「明日の保育の構想につながる記録のあり方～「保育マップ型記録」の有用性～」『保育学研究』6(2), 2008, pp 245-256.
- 佐藤郁也『質的データ分析法 原理・方法・実践』, 新曜社, 2008
- 橋川喜美代「保育記録による園内研修と保育の振り返り：選抜研修がもたらす保育者の変容と園内への学びの広がり」『兵庫教育大学研究紀要』第49巻, 2016, pp 9-18.
- 林悠子「保育実践における「過程の質」－保育記録の分析から－」『佛教大学社会福祉学部論集』第7巻, 2011, pp 77-94. 文部科学省『幼稚園教育指導資料 第5集 指導と評価に生かす記録』, 平成25年
- 文部科学省『幼稚園教育要領解説』, 平成30年

